



# 松江市北東部遺跡 分布調査報告書(1)

1984年3月

松江市教育委員会

## 凡 例

- 本書は、松江市教育委員会が昭和58年度において国庫及び島根県補助金を得て実施した松江市持田地区の分布調査事業の概要報告書である。
- 分布調査事業の組織は、下記のとおりである。

事業者 松江市 松江市長 中村芳二郎  
主体者 松江市教育委員会 教育長 内田 篤  
事務局 松江市教育委員会 社会教育課  
総括 社会教育課長 石城 進  
担当者 文化係長 岡崎雄二郎  
同様主事 中尾秀信  
調査員 遠藤浩巳、森 誠司、桑原真治  
調査補助員 高島日出男、岩本重雄、清水義正  
遺物整理作業員 桑原真治  
作業員 松本克義、奥田昭、片寄清福、井上節夫、土井功吉、上野文男、佐々木広、佐々木満喜夫、宮廻太郎、松本清江、西村恵子、片寄ミサ子、森井恒子、田中文子、足立美智子、宮廻八千代

## 目 次

I 調査に至るいきさつと経過 .....	1
II 歴史的環境 .....	6
III 調査の概要 .....	6
1. 試掘調査 .....	6
2. 測量調査 .....	15
IV 小 結 .....	27
1. 試掘調査について .....	27
2. 分布調査、測量調査について .....	28

## I 調査に至るいきさと経過

松江市経済部耕地課では、営農の効率化を図るために既存の水田地の平面形態を画一化すると共に水路の整備を目的として場整備事業を実施してきたが、昭和59年度からは松江市の北東部にあたる持田、坂本、福原、本庄、新庄地区一帯の水田約50haを対象地区とすることになった。

一方、島根県松江農林事務所では、本庄から西持田地区に至る大型農道を工事中であるが、これが完成すれば、周辺の地域開発が一層進行することが予想された。

ところが、工事区域一帯には、古代の条里制遺構をよく遺存する「持田川流域条里制遺構」<sup>①</sup>をはじめとする水田遺跡、「坂本中遺跡」<sup>②</sup>のように須恵器、土師器の大量出土により大規模な集落跡が推定される箇所、又、出雲國風土記に記載されてはいるが、まだ考古学的に確認されていない「島根郡家跡」<sup>③</sup>など、多種多様の遺跡が、眼に留めていることが分かった。

そこで、耕地課と協議し、事前の分布調査なり、試掘調査を実施して遺跡の概要と価値を確かめることになった。

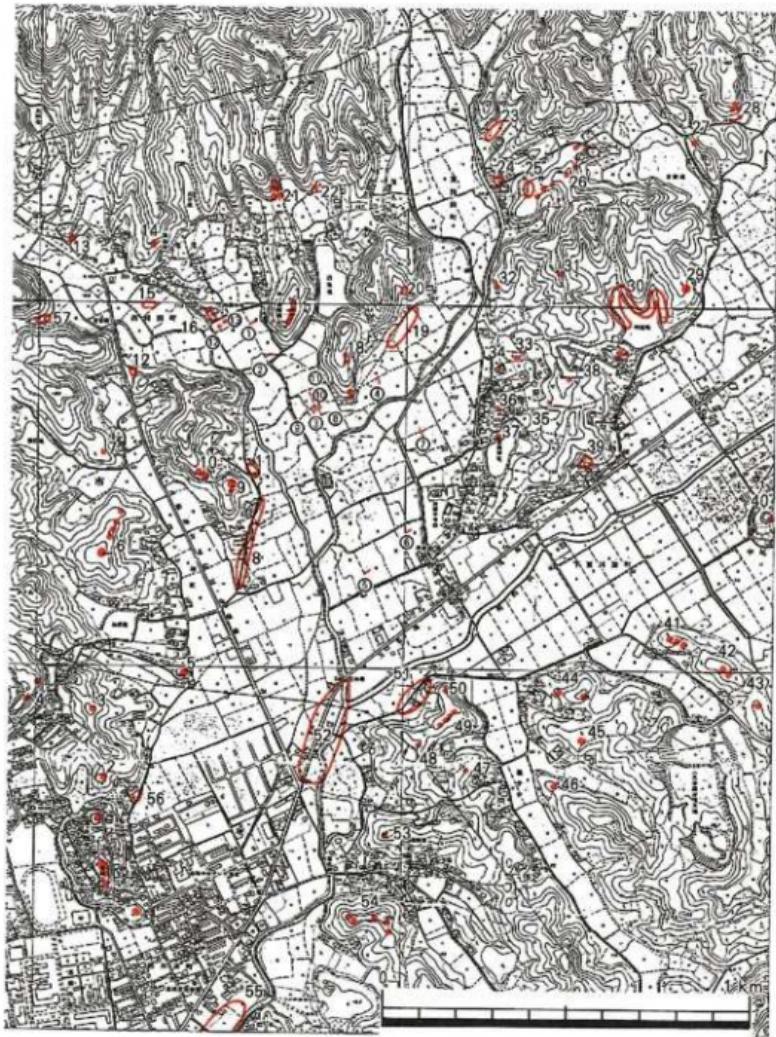
昭和59年度における場整備事業対象区は、西持田町の25haであるので、持田川を挟んで東に展開する東持田町の水田地帯も、共に調査の対象とし、計13か所において、試掘調査を実施し、合わせて周辺丘陵の古墳等の測量、分布調査を実施した。

調査は、昭和58年10月18日から昭和59年3月8日までの内、41日間を要して行なった。

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	名 称	所 在 地	内 容	備 考
1	金崎古墳群	西川津町金崎	1号 - 前方後方墳 全長36m、高5m、竪穴式石室4×1×1m、仿製内行花文鏡1枚、子持勾玉等、須恵器 2号 - 方墳 15×15m、高3m 3号 - 方墳 22×22m、高4m 箱式棺 4号 - 方墳 20×25.5m 5号 - 前方後方墳 全長25m、高4m、須恵器 6号 - 方墳 20×20m、高2m、木棺礫床 7号 - 方墳 12×7.5m、高2.5m 8号 - 方墳 9.4×7m、高1.5m	

番号	名 称	所 在 地	内 容	備 考
			9号一方墳 $14 \times 11m$ 、高1.5m 10号一方墳 $12 \times 12m$ 、高2m 11号一方墳 $9 \times 9m$ 、高2m、木棺	
2	福 山 古 墳	西川津	方墳 $17 \times 17m$ 、高5m、土師器片、円筒埴輪片	
3			方墳 $10 \times 10 \times$ 高2m	
4	深 町 古 墳 群	西川津町 深町	1号 - 円墳 径20m、高2m 2号 - 円墳	
5	深 町 横 穴	西川津町 深町	須恵器	
6	宮 垣 古 墳 群	西持田 和田	1号 - 方墳 穴式石室、須恵器 2号 - 円墳 径30m、高5m 3号 - 方墳 $10 \times 8m$ 、高0.5m 4号 - 方墳 $7 \times 7m$ 、高0.5m 5号 - 方墳 $8 \times 7.5m$ 、高0.5m 6号 - 方墳 $17 \times 16m$ 、高2.3m	
7	国 石 古 墳	西持田	方墳 辺20m、高2.5m	
8	和 田 上 遗 跡	西持田 和田	須恵器片散布	
9	太 源 古 墳 群	西持田 和田	1号 - 円墳 径35m、高5.5m 2号 - 方墳 $9 \times 9 \times$ 高1m	
10	尾 上 横 穴 群	西持田 和田	2穴	
11			遺物散布地 - 須恵器	
12			遺物散布地 - 須恵器	
13	垣 の 内 古 墳	西持田 日吉	亜流の石棺式石室	
14	洞 泉 寺 裏 古 墳	西持田	方墳 $11 \times 11 \times$ 高1.5m	
15			遺物散布地 - 須恵器(高杯、鏡)	
16			遺物散布地 - 須恵器片	
17	松 の 前 古 墳 群	西持田 松の前	方墳12基	
18	小 丸 山 古 墳 群	東持田 小丸山	方墳4基 1号 - 1辺10m、高2.5m 2号 - 1辺5m、高2m 3号 - 1辺15m、高3m	
19	城 / 越 遺 跡	東持田 城 / 越	須恵器、土師器	
20	城 / 越 横 穴	東持田 城 / 越	壺入、須恵器	
21	穴 の 口 横 穴 群	西持田 龜尾	5穴以上	
22	鍛冶屋 谷 横 穴	東持田 以後	平入	
23		東持田 石野	須恵器	
24		東持田 石野	須恵器	
25		東持田 石野	須恵器	
26	石 野 古 墳 群	東持田 石野	方墳5基	
27	常 熊 古 墳	東持田	横穴式石室又は石棺式石室 須恵器、土師器、刀、玉	
28		東持田	方墳4基 1号 - $12 \times 12m$ 、高1m	



第1図 周辺の遺跡分布図

番号	名 称	所 在 地	内 容	備 考
			2号—6×6m、高0.5m 3号—5×5m、高0.5m 4号—7.8×7.8m、高0.5m	
29		東持田 納佐	円墳 径24.5m、高3m	
30	納 佐 池 遺 跡	東持田 納佐	須恵器(蓋杯、平瓶)	
31			方墳 14×10m、高1m	
32	立 花 横 穴	東持田 太田	須恵器	
33	太 田 5 号 墳	東持田 太田	石棺式石室 平入	佐々木亮畑中 古墳と同じ
34	太 田 4 号 墳	東持田 太田	石棺式石室 妻入	佐々木浅市宅 庭古墳と同じ
35	太 田 3 号 墳	東持田 太田	石棺式石室 妻入	野津真宅前古 墳と同じ
36	太 田 2 号 墳	東持田 太田	石棺式石室、厨子形棺、平入	加美古墳と同じ
37	太 田 1 号 墳	東持田 太田	石棺式石室、平入、埴輪	加佐奈子古墳 と同じ
38	道 仙 古 墳 群	東持田 道仙	1号—14×9m、高1.5m、土壙 2号—8×10m、高1.5m、土壙 3号—10×10m、高1.5m、土壙 5号—16×16m、土壙 蓋棺2	
39	納 佐 遺 跡	東持田 納佐	須恵器片	
40	中 尾 古 墳	下東川津 中尾	方墳 21×21m、高3.5m、 上師器片	
41		下東川津	方墳3基 1号—10×10m、高1.5m 2号—10×10m、高1.5m 3号(川津12号墳)—10×8m、 埴輪片	
42		下東川津	方墳2基 1号—5×5m、高2m 2号(川津11号墳)—10×10m、 高2.5m	
43		下東川津	方墳 10×10m、高2m	
44		下東川津	方墳2基 1号—15×15m、高2m 2号—10×10m、高1.5m	
45		下東川津	方墳 10×15m、高1.5m	
46			方墳 8×10m、高1.5m	
47			方墳 4×4m、高1m	
48		西川津 貝崎	方墳 15×15m、高2m	
49		西川津 貝崎	方墳4基	

番号	名 称	所 在 地	内 容	備 考
			1号・10×10m、高1.5m 2号・10×10m、高1.5m 3号・20×20m、高2.5m 4号・10×10m、高1.5m	
50	貝崎古墳	西川津 貝崎	方墳 20×20m、高4m	
51	西川津貝崎遺跡	西川津 貝崎	土師器	
52	西川津弥生遺跡	西川津 貝崎	弥生式土器、石斧、石鐵	
53	住吉神社裏古墳	西川津 大内谷	方墳 20×18m、高2.5m、埴輪、葺石	
54		西川津 大内谷	方墳4基 1号—6.5×6.5m、高2.5m 2号—15×17m、高2.5m 3号—10×10m、高1.5m 4号—11×17m、高2.5m、葺石	
55	原の前遺跡	西川津	繩文～歴史各時代の土器片	
56		西持田	黒曜石片	
57		西持田 日吉	須恵器(長頸壺)	
①	第1調査区			
②	第2 "			
③	第3 "			
④	第4 "			
⑤	第5 "			
⑥	第6 "			
⑦	第7 "			
⑧	第8 "			
⑨	第9 "			
⑩	第10 "			
⑪	第11 "			
⑫	第12 "			
⑬	第13 "			

## II 歴史的環境

持田地区一帯の田畠、丘陵には数多くの遺跡が知られている。以下、その概要を述べる。

まず今回調査の対象となった持田川流域条里制遺跡は、東持田、西持田、西川津地区一帯の水田地に認められる。幅1~2m、高さ0.1~0.4mの畦畔が100~130mの間隔で直交あるいは平行しているものでこれが古代の条里制の方格地割を推定せしめるものである。

次に1西川津の金崎古墳群は国の史跡に指定されている中期型の方系墳の古墳群で山陰Ⅰ期の須恵器を副葬した1号墳が有名である。又、4深町古墳群や6宮垣古墳群、9太源古墳群、29では比較的大形の円墳が見受けられ、方形墳の多い中で土着勢力内部と畿内勢力との政治的関係を考える上で重要である。おおむね中期型の古墳であろうと思われる。

この地区には、所謂「石棺式石室」の集中していることでも注目されている。すなわち東持田の太田地区に5基の石棺式石室が集中しており、最近33~37「太田古墳群」という呼称でまとめられている。

最も古い古墳は、38道仙古墳群である。いずれも小規模の方墳であるが直刃鎌や鉈を副葬する土壤や、古式土師器の櫛棺を2基陪葬するなど特異なもので前期の古墳である。<sup>④</sup>

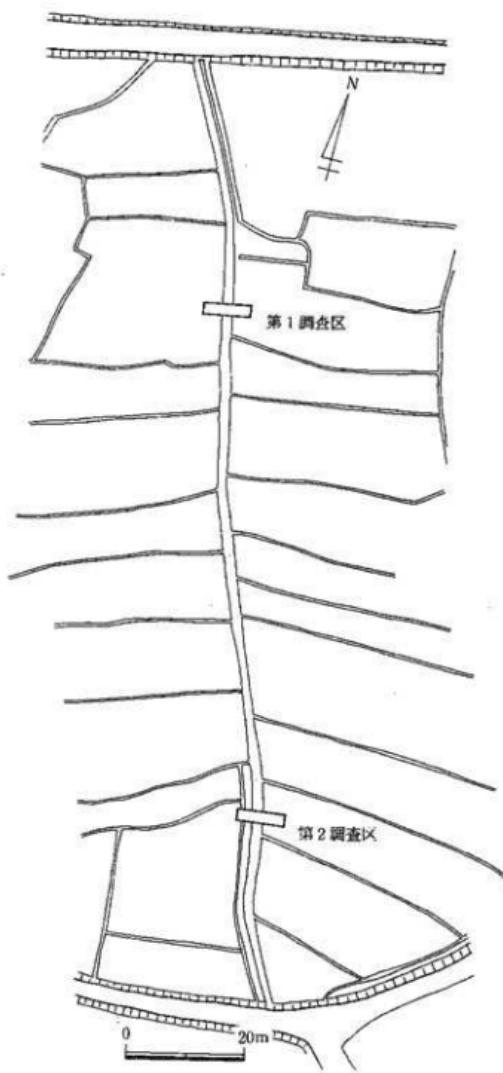
52西川津弥生遺跡、55原の前遺跡では縄文、弥生~歴史の各時代にわたる土器や石器、木器が、朝駒川河川敷から多量に出土しているので縄文時代の早い段階から当地区一帯に人々が住みついていたことが知られるが、その居住地については、古墳時代の前期、中期頃の集落跡が最近判明しつつある以外はまだ未確認である。<sup>⑤</sup>

## III 調査の概要

### 1. 試掘調査

#### 第1調査区

持田神社の東南水田中の南北に走る畦畔に直交した調査区、東西に細長い幅2m、長さ8mのトレンチを設定。北壁によって土層をみると第I層は厚み20cm余りの耕作土で暗灰色の粘性土である。第II層は厚み70cm以上の暗灰色粘土となる。畦の直下は、水田面と違い小石を少量含む粘性土が続き、その下層に粘土を若干含む暗青灰色の砂層が溝状に南北に走っていた。溝の幅は上部で40cm、深さは中央部で25cmを計る。第II層から掘り込まれているが、西側では、界線は確認出来なかった。これらの土層の東に長さ90cm、直径6cm



第2図 第1、2調査区位図

ほどの木杭がやや斜めに打ち込まれていたが、その上端は、現在の畦道の上端近くにまで及んでいる。この木杭は、トレンチ内で、5本、南北に20cmの間隔で連続していることが確認された。出土遺物はなし。

#### 第2調査区

第1調査区から100m南東の同一の畦を東西に細長く設定したもの。幅2m、長さ8mのトレンチであるが、西寄りの水路部分約2mについては調査しなかった。ここでは、畦直下から東側水田直下において黒灰色粘性土層(第VII層)が認められたが、畦のすぐ東側において、溝状となっていることが、注意される。すなわち、溝の上端は約70cm、下端約40cm、深さ約25cmの断面U字形を呈する。この土層は、畦の西側では、消失しているが、水田面のレベルが低くなっているので、削平された可能性が強い。

#### 第3調査区

疊層が上下2層から確認された。疊は、いずれも直径5~20cmほどの円~亜蝶である。上部の疊層は、北側の水田面下約50cmのレベルに部分的に厚み最大10cmほどのバンド状を呈する。下部の疊層は、上部の疊層からさらに30cmほど下位にあり厚さは、未確認であるが40cm以上、南の水田直下ではば垂直に落ち込んでいる。

これら2つの疊層の間の土層は、暗褐~暗緑色の砂質土で、縄文時代晚期頃の土器片と、黒曜石片2片が発見された。

これらの土器片は、いずれもかなり磨滅しており、上流から流されてきたものと思われる。

畦直下からは、直径5cm、長さ20cmの木杭が、1本直立した状態で発見されたが、これは、第V層から打ち込まれている。

#### 第4調査区

第3調査区の畦の東側約200mの延長線上にあたる。東西に延びる畦道を中心にそれに直交して、南北に細長い幅2m、長さ8mのトレンチを設けた。

畦道直下の第2層である褐色粘土層では鉄製角釘が1本発見されたが、時代を限定することが困難である。

共通する上層は、暗褐色粘性土であるが、南部水田面下においてこの土層から打ち込まれた木杭がトレンチ内で計5本、20cmから35cmの間隔で東西方向に並んだ状態で発見された。鉄釘の他に遺物は皆無であった。

#### 第5調査区

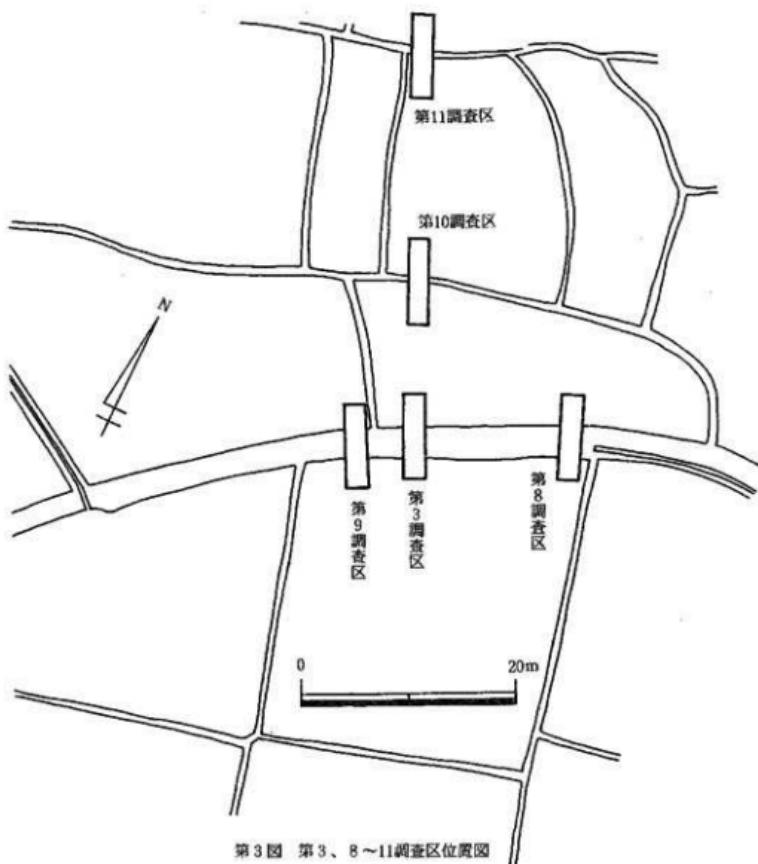
畦を中心にして東西に設定したトレンチ。東側の水田面下、第2層の褐色土層中で須恵器片

を一片発見したが、壊滅した壺片で流された可能性が強いものである。

同じく東の水田面下の最下層である淡褐色粘性土界面において、長さ65cmほどのやや浅い凹地があったが、深さが10cmと大変浅いもので溝といえるかどうか疑問である。

#### 第6調査区

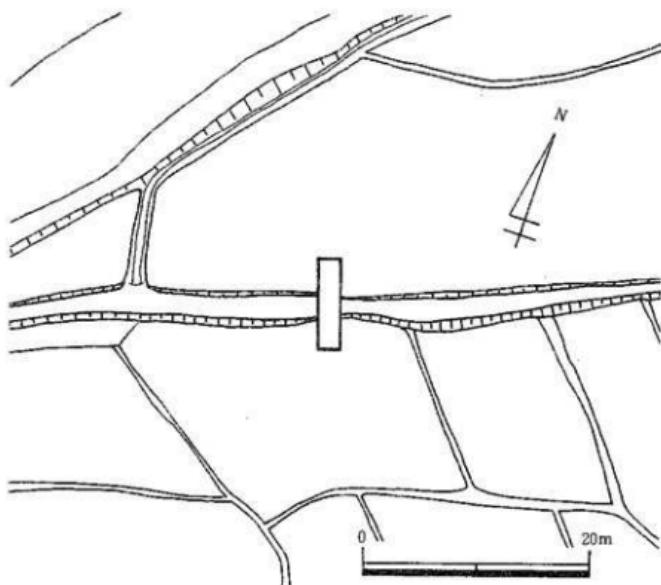
第5調査区の畔の東側へ約130m延長した箇所に設定したトレンチである。最下層の青灰色粘土層を掘り込んで2か所の凹地が認められた。東側のものは、上幅約1.8m、下幅0.8m、深さ30cmを計る。溝としてよいものである。西側のものは、上幅50cm、深さ15cm



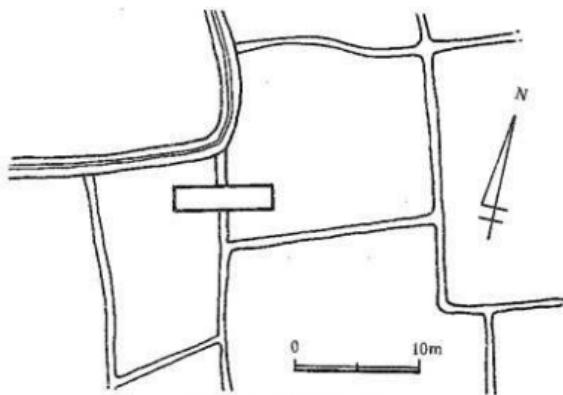
第3図 第3、8～11調査区位置図

はどの断面三角形状を呈するもので溝とは考えにくい。

他に遺物はなし。



第4図 第4調査区位置図

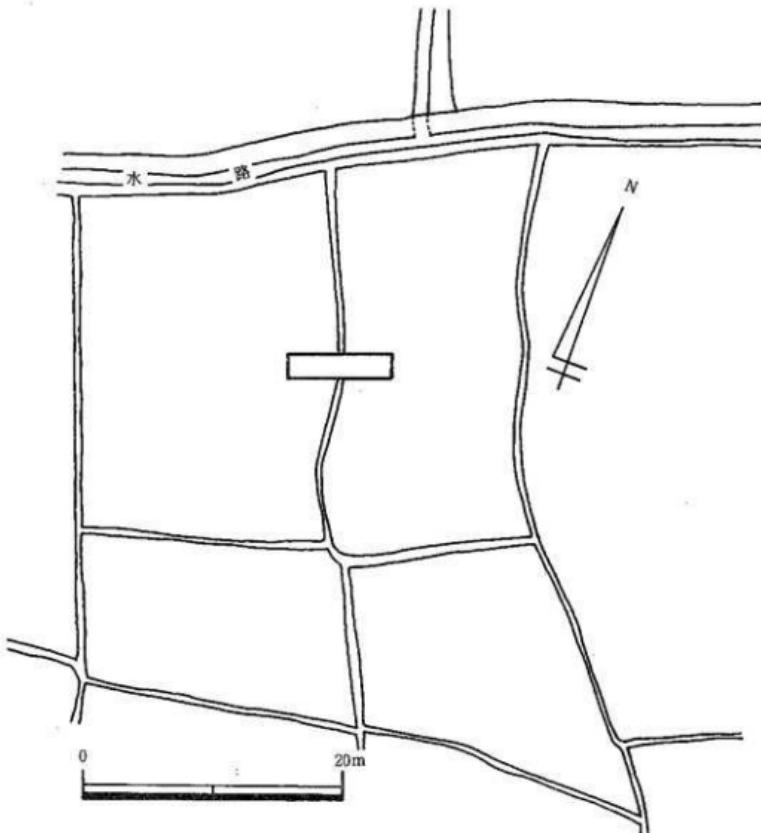


第5図 第5調査区位置図

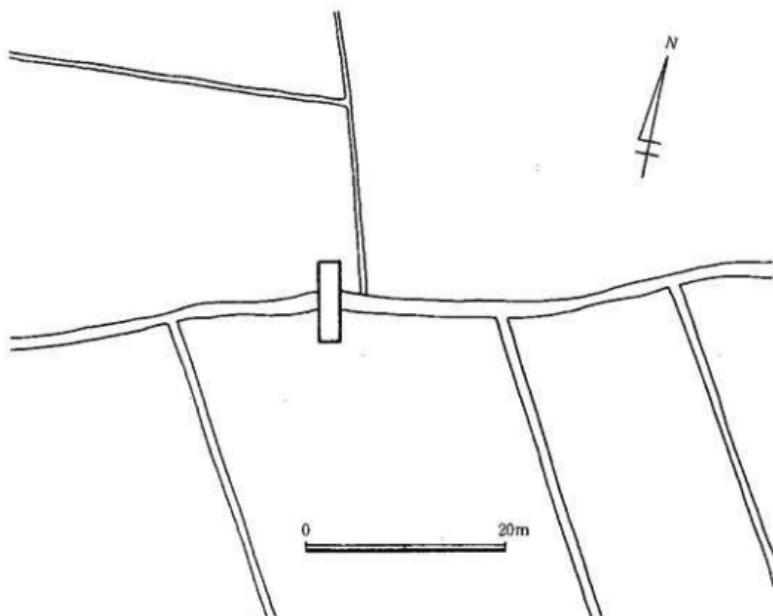
### 第7調査区

中途の上崩に灰色砂質土があるが、畦の北側において、その砂質土を掘り込んで溝が確認された。溝は、上幅1.55m、下幅1.2m、深さ50cmを計り、ほとんど同じ灰色砂質土が含まれている。この溝の底部は、2段となり、暗灰色砂質土が含まれていた。2段目の溝の上幅は、75cm、下幅60cm、深さ15cmを計る。

出土遺物はなし。



第6図 第6調査区位置図



第7図 第7調査区位置図

#### 第8調査区

第3調査区の東側12mの箇所に設定した調査区で畦を中心南北8m、幅2mのトレンチである。

最下層は厚み60cm以上の淡青灰色粘土層で、直径10cmの礫を若干含むが、縄文時代晩期と思われる土器片を10数片ほど包含していた。この包含層位は、耕作土上面から70~80cm下位である。

その上層は、北部水田面下において黒灰色粘土層が厚み20cmほど堆積し、南部畦側で切れている。そして畦下で再び暗灰色粘土層が堆積している。

この土層の切れた部分は、上幅1m余り、下幅74cm、深さ20cm余りを測る。底面に砂は堆積していなかったが恐らく溝であろう。その時期は不明である。

#### 第9調査区

第3調査区の西側、3mの箇所に設定した調査区で、畦を中心南北8m、幅2mのトレンチである。

時直下の第IV層(暗灰色～暗緑色粘土層)中から縄文晚期と思われる土器片がおよそ100片ほどと黒曜石の破片1片、叩き石と思われる石1個が発見された。縄文土器片の中には底部もあった。

その包含層は、厚み15cm前後あり、炭化物も若干含んでいた。

#### 第10調査区

第3調査区の北側5.5mの地点の畦を中心に設定した南北8m、幅2mのトレンチである。

最下層は、直径1～10cmの砂礫層である。その上層は、北部で20cmの厚みの灰色砂層が堆積し、いずれも、河川敷又は氾濫原であったことをほのめかす。この土層には北部で直径40cm前後の流木が含まれておりどんぐりの実などの自然遺物や炭化物を多く含んでいた。

#### 第11調査区

第10調査区の北側に設けた南北に長いトレンチである。耕作土層の下位の灰色粘土層下部からは須恵器片、さらにその下層の暗灰色粘土層下部からは縄文土器の破片を出土。

その下層であるIV、V層は粘土混り砂層で遺物を全く含まない土層である。最下層は砂礫層で直径1～10cmほどの亜謙、円謙を多く含む。この層にも遺物を含まない。IV、V層及び砂礫層は東壁、南壁で観察する限りかなり変化しており氾濫原もしくは河川敷のような箇所であったことがわかる。このことは、砂層、砂礫層の凹地が認められるトレンチ南東部に堆積している黒灰色粘土層の中に木の炭化物やドングリなどを多く含んでいることからも分かる。

## 第12調査区

持田神社の宮司宅前の畠地に設定した $4 \times 4$ mの正方形グリッドである。厚み15cmの畠地耕作土の下層は地山面まで全て粘土層である。地山は砂質の黄褐色土層で表面に1~10cmの凹縁を多く含む。持田神社背後の低丘陵の突端部にあたるため調査区内では地山が東北部から南西方向へ向けて急傾斜していく。

遺物は、耕作土層から第Ⅲ層の灰色粘土層まではぼんくなく出土した。種類は弥生時代後期の甕形土器の口縁部や須恵器、土師器の破片が認められ、黒曜石の小片もかなり出土した。完形品に近い大形品は上部では告無で小片が目立つ上、小縁もかなり含んでいたが、地山面に近くなるにつれて比較的大きい破片も含まれるようになる。

出土遺物の内、まず弥生式土器の破片であるがいずれも直径1~2ミリの石英粒を多く含み、褐色を呈する。器形のうかがい知れるものは殆どないが、口縁部がやや外傾し凹線文を数条入れた甕形土器の口縁部の破片が認められ弥生後期後半頃のものであることが知られる。須恵器の内、蓋杯類の中に頂部又は底外面を回転ヘラ削りしたものや、杯身の蓋受部の立ち上がりの比較的高いものがありこれらの特徴は山本編年でいうところの第Ⅲ期に該当するものである。次に蓋杯類の内、底外面又は頂部の無調整のものが見られるが、この特徴は、山本編年でいうところのⅣ期に該当する。さらに杯類の底外面に高台をつけたものや、回転糸切り痕を有するもの、蓋類で反りをもつもの、凝宝珠を有するものなどがあり7C~8C後半(柳浦編年でいう第1式~第4式)<sup>(7)</sup>頃に至るまでのものが多く見受けられた。

土師器類には単純口縁の壺片や壺類さらには土製支脚、瓶の把手などが見られ生活の場で使用された道具が多い。

さらに、平安末~中世前期にかけての国産陶器であるいわゆる「龜山焼」類似品も數片あった。<sup>(8)</sup>

## 第13調査区

土層は表土から耕作土、灰色粘土層、地山となっている。耕作土は厚み15~20cmでカワラケ、近世以後の陶磁器類の破片、黒曜石片を含んでいる。

第2層の灰色粘土層は厚み10cm前後で遺物を含む。遺物は、須恵器では山本編年でいうⅢ期の鉢や高台付の杯類、土師器では壺又は甕の口縁部の破片、高杯の接合部などが認められる。他に黒曜石の破片の多いことも注意される。破片の中には石鎚に加工中途の半製品も見受けられた。又、中世の土師質の摺鉢の破片も一片あった。

調査区が、低丘陵の突端部中央に位置することから、地山面は浅く検出され南部へ傾

斜している。地山面において遺構は検出されなかった。

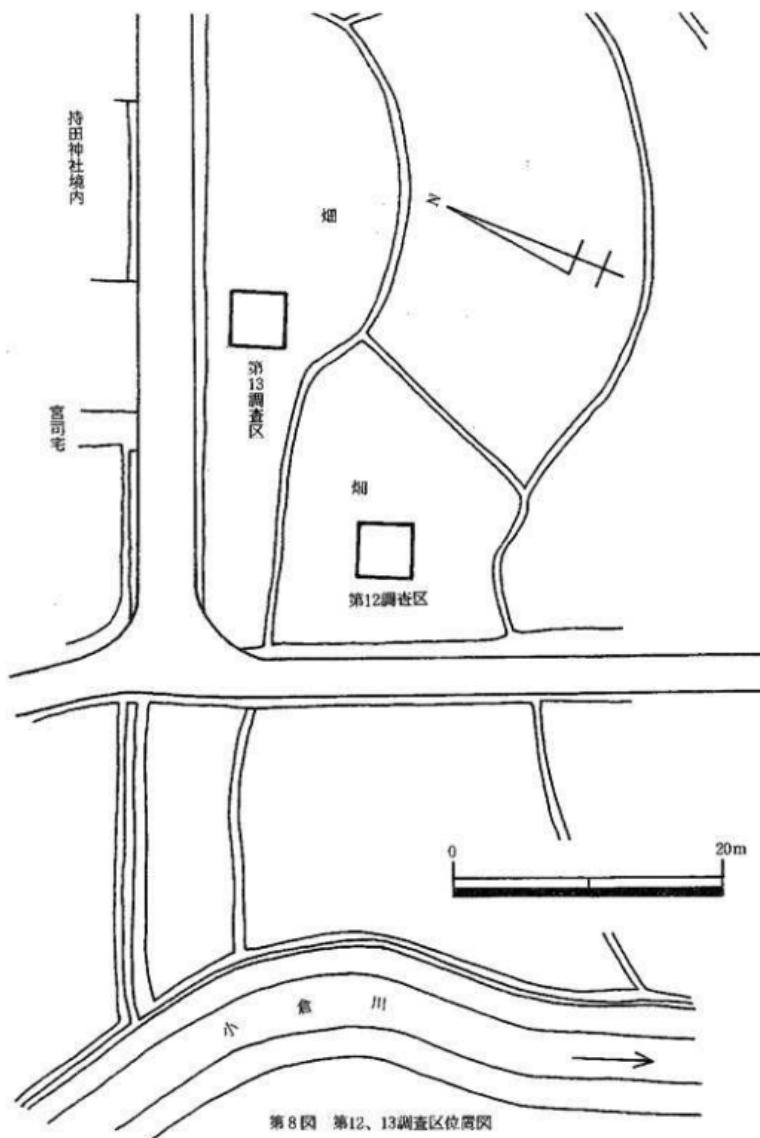
## 2. 測量調査

試掘調査をした箇所の内、第1、2、12、13調査区の所在する谷間水田の東側に所在する松の前古墳群を測量した。標高50m近くの頂部の狭い尾根上に計12基の方墳が認められる。この内、第1号墳は丘陵の南側に位置し墳頂部の標高約25mを計る。一辺6m、高さ1mの小規模の方墳で東、北部に幅2m、深さ1mの空濠を設ける。1号墳と2号墳の間には現在草地があり、もとの地形がよく分からぬが古墳のあった形跡は見当たらない。

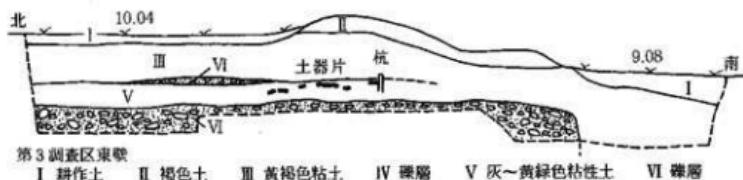
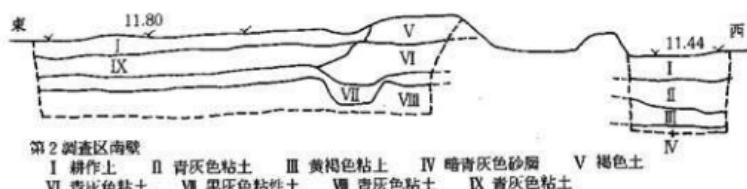
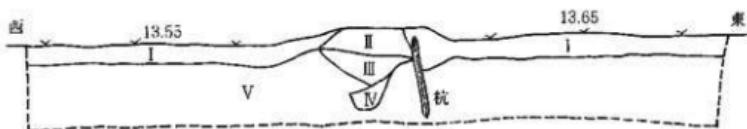
第2号墳から10号墳まではそれぞれの南北の周溝を共有し、墳丘が隣接し合っているものである。

第2号墳は、これまで単一の「松の前古墳」と呼称されていたもので、一辺17m×15m、高さは兩側で1.5m、北側2号墳側で0.5mを計る。第3号墳から第11号墳までは一辺10mに満ない小規模の方墳である。第11号墳と第12号墳はやや離れて所在する。いずれも丘陵の高い側では墳丘の立ち上がりがなく、低い側に僅かにみられるのみである。

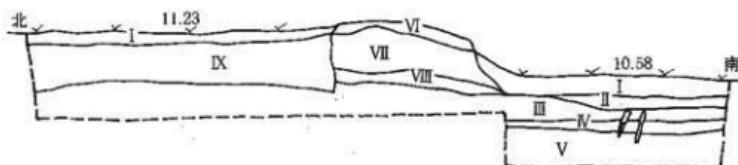
古墳群全体のこうした特徴は、最近調査された島根県八束郡鹿島町所在の奥才古墳群の立地に酷似する。奥才古墳群は、前期～中期にかけての小規模方墳と円墳からなるものであり、本古墳群もあるいはそうした時期に連続継起的に構築された同族集団の古墳群であると思われる。



第8図 第12、13調査区位図

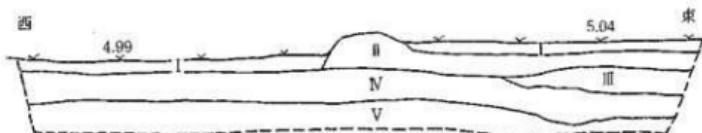


0 2 m



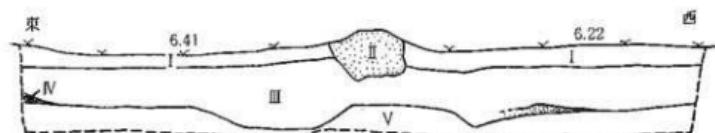
第9図 トレンチ断面図(1)

数字は標高



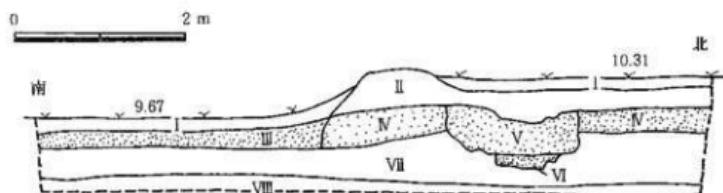
第5調査区北壁

I 耕作土 II 褐色土 III 褐色～青灰色粘性土 IV 青灰色粘土 V 淡褐色粘性土



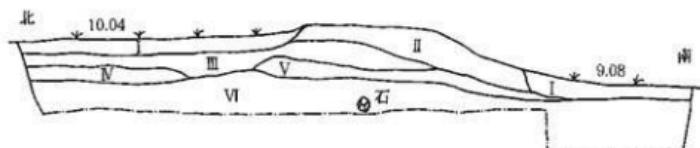
第6調査区南壁

I 耕作土 II 褐色砂質土 III 砂混り粘土 IV 砂層 V 青灰色粘土



第7調査区西壁

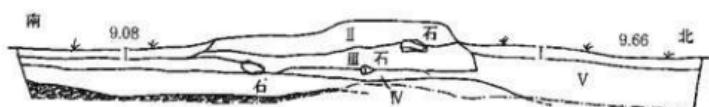
I 耕作上 II 褐色砂質上 III 淡褐色砂層 IV 酸化赤味灰色砂質上 V 灰色砂質上  
VI 暗灰色砂質上 VII 灰色粘性土 VIII 青灰色粘性土



第8調査区東壁

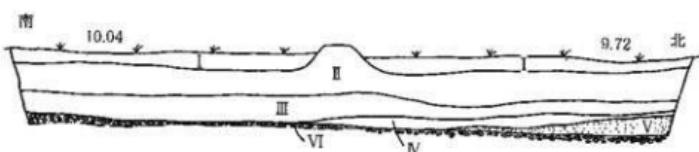
I 耕作上 II 褐色土 III 灰色粘土層 IV 黑灰色粘土層 V 暗灰色粘土層  
VI 青灰色粘土層(砾石千含む)

第10図 トレンチ断面図(2)



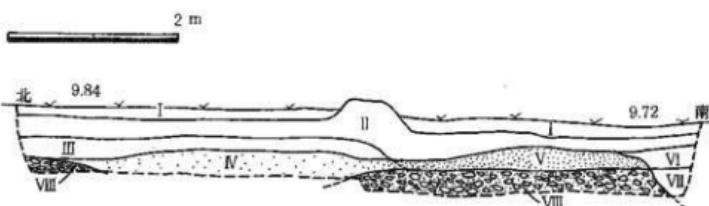
第9調査区西壁

I 耕作土 II 棕色土 III 明灰色粘土 IV 暗灰色粘土 V 灰色粘土  
VI 青灰色粘土 VII 砂砾层



第10調査区西壁

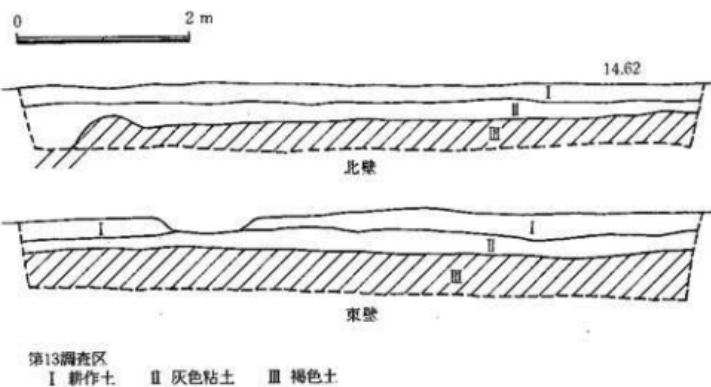
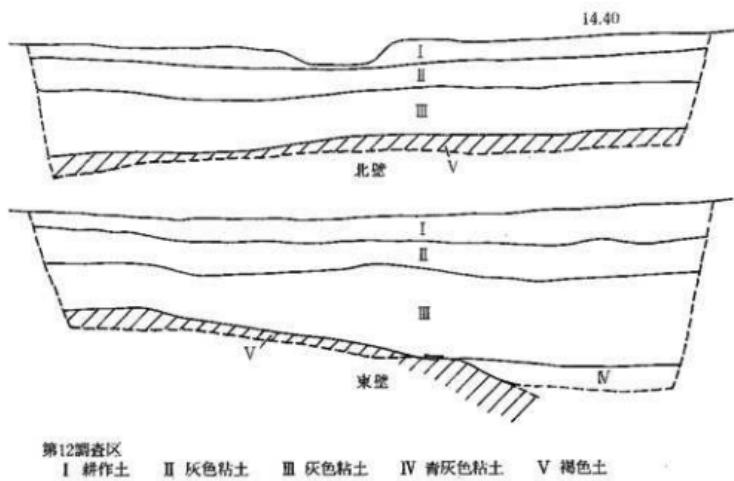
I 耕作土 II 灰色粘土 III 青灰色粘土 IV 黑灰色粘土 V 灰色砂层  
VI 砂砾层



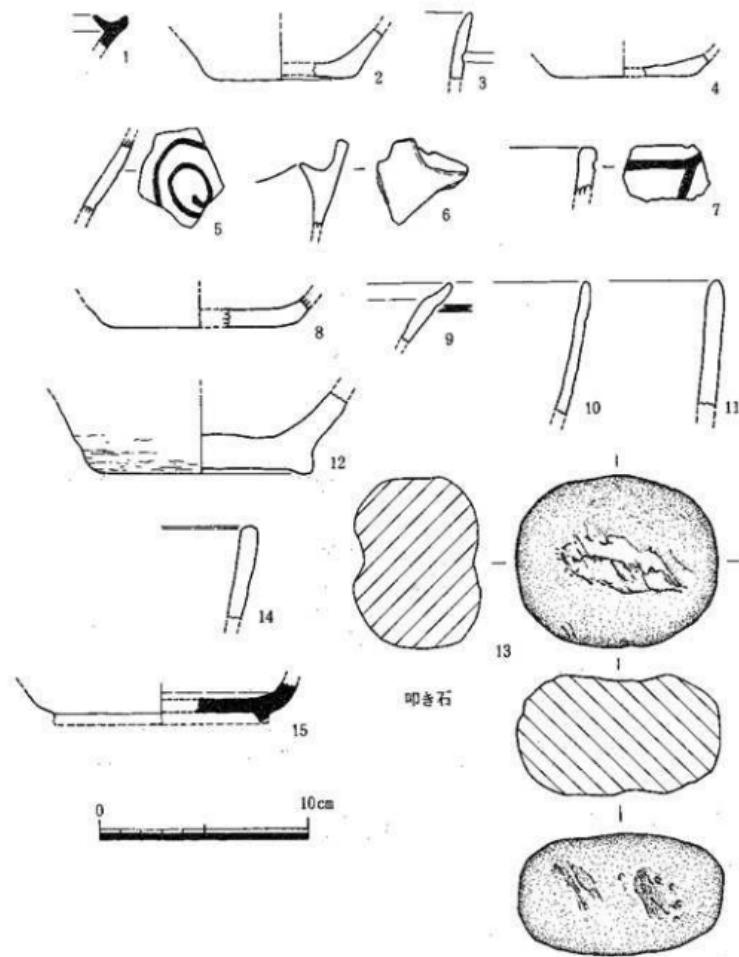
第11調査区東壁

I 耕作土 II 灰色粘土层 III 暗灰色粘土 IV 青灰色砂层 V 青灰色砂层  
VI 青灰色粘土 VII 黑灰色粘土 VIII 砂砾层

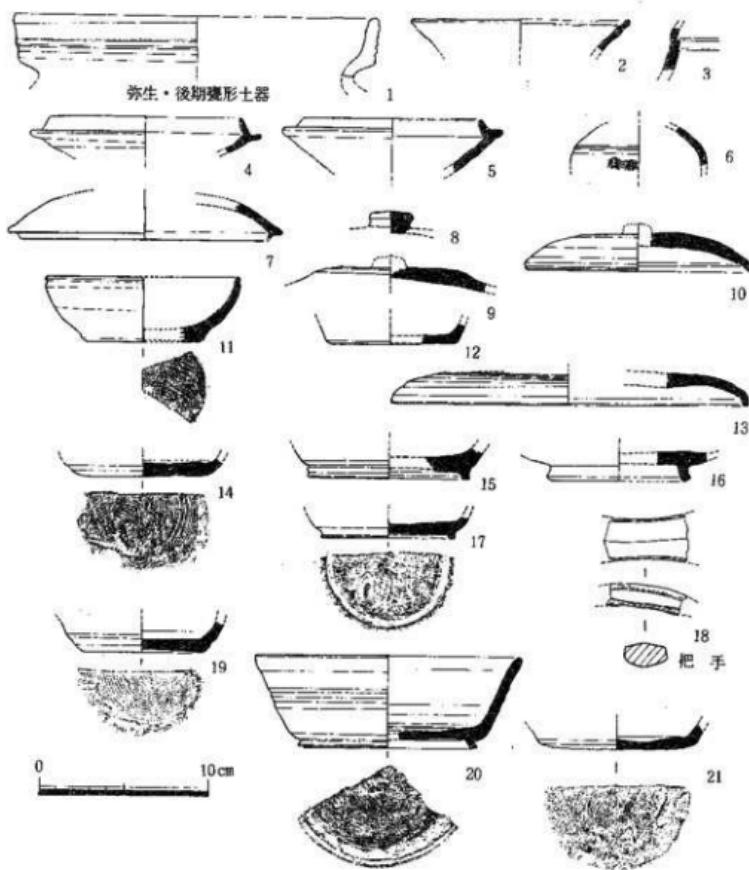
第11図 トレンチ断面図(3)



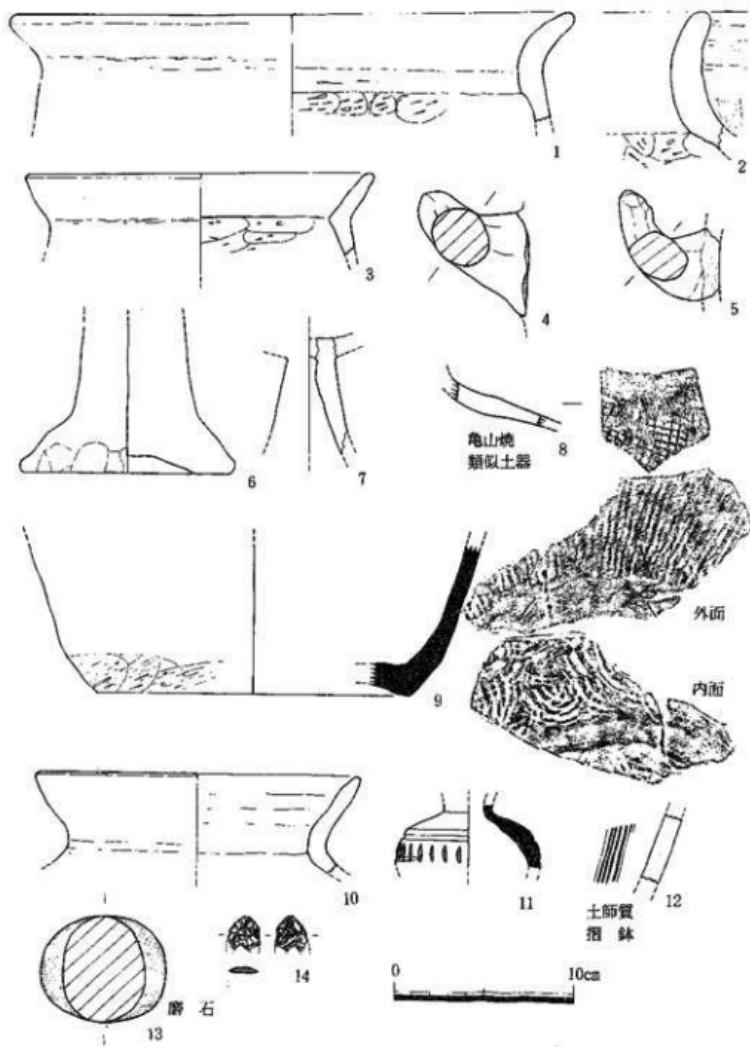
第12図 第12、13調査区断面図



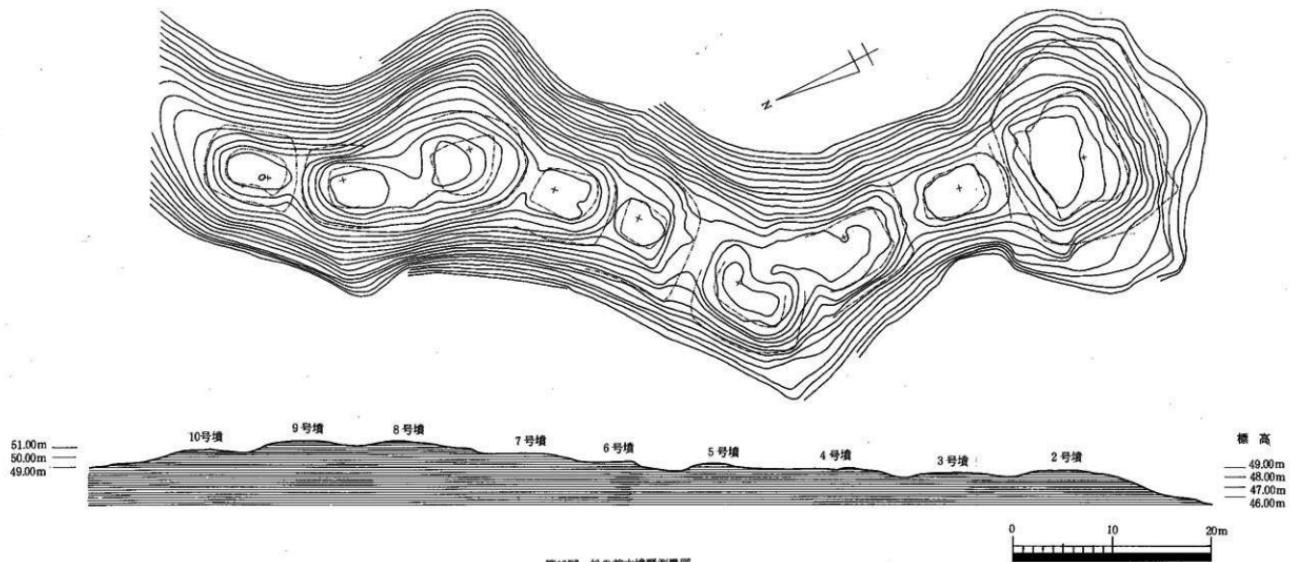
第3調査区 1、2  
第8調査区 3、4  
第9調査区 5~13  
第11調査区 14、15



第16図 出土遺物実測図(2) 第12調査区



第17圖 出土遺物測量圖（3）  
第12調查區 1～9  
第13調查區 10～14



第13図 松の前古墳群測量図

## IV 小 結

### 1. 試掘調査について

主として条里制遺構の検出を目的として調査したが、古代の遺構は不明確であった。

まず、溝であるが第1調査区、第2調査区で顕著にみられた。幅40cm、深さ25cmの小規模のものである。遺物が伴っていないのではっきりとした時期は分からぬが、かなり深い位置にあり明らかに人工的なもので最近のものではないことは確かである。それでは、古代の条里遺構に合致するものかどうかということになるが決め手に欠く。今後は科学的な方法によって検討していく必要がある。

次に畦道であるが、これは上面から20cm～30cmの深さまでに、すき間の多い軟質褐色土があり円礫が下部界面に含まれていた。この土層には江戸期以後の陶磁器、黒瓦片を含んでいたので近世以後、土盛をして補修したことが知られる。

古代の条里遺構が構築されたとするとそのレベルはこの褐色土層より下位にあることになる。

このように、発掘調査では、条里遺構が明確に検出出来なかつたので、地形測量図によつて大まかに条里景観を復元してみた。

使用した地形図は、松江市土地改良区がほ場整備事業を実施するにあたつて作製した千分の一平面図である。

これによつて、ほぼ方形となるような直交する直線を求めれば、第14図の如くなるが、その畦道の中心から中心までの距離は最短90mから最長130mを計る。もっとも、現在の畦道は川の変化などの要因によつて微妙に曲がっているので正確ではないが、他の地区的事例を考えるとそつて端な誤差はないものと考えられる。

これによつて抽出した一区画が条里でいう「坪」に相当するものと思われる。磁北に対する角度は約N25°Wで当地区より東部にいくとやや角度の違うことが指摘されている。

次に出土遺物であるが、第1、2、4、6、7調査区では皆無であった。第5調査区では上位の土層から須恵器壺片が1片出土したがやや磨滅しているので、流されてきた可能性が強い。

第3、8、9、10、11調査区は隣接しているが、一様に縄文後期～晩期の土器片と黒曜石片が出土した。

出土土層は水田面下60～70cmほどの深さにある淡灰～淡緑褐色の粘性土で各調査区ともほぼ同様である。

土器片は一様に磨滅し小片であり上流から流されてきたことが知られる。

器形の分かるものとしてはほぼ直立する口縁部（第15図3、7、10、11）、すり消し縄文と思われるうず巻き文様部分（第15図5）、口縁部に突起状の装飾部分をもつもの（第15図6）、やや上げ底の底部（第15図12）がある。他の大半の破片は磨滅が著しく器表面の文様や整形技法がよく分からぬが恐らくは無文粗面の土器片が多いようである。

黒曜石片は、小片が多く加工した形跡は認められなかった。

他に磨石（第17図13）、叩き石（第15図13）が認められる。

統いて第12調査区であるが、表土から地山面まで豊富に土器片が出土している。

縄文土器片や黒曜石片ももち論含まれていたが、弥生時代後期の壺片や古墳時代の土器も認められた。

古墳時代のものは、古い段階の須恵器類の一部と思われるもの（第16図6）や後期（6C後半頃）のもの（第17図11）などが認められる。

最も量的に多いのは、高台を付けた杯（第16図20）や糸切底のもの（第16図21）で、おむね7C後半から8C後半頃にかけてのものである。

第13調査区では、地山面が浅く、生活の場として利用されやすい立地条件であるにもかかわらず、遺物の量は少なかったが、これは耕作のために地山面近くまで擾乱されたためであろう。いずれにしても縄文時代から歴史時代にかけて12、13調査区のすぐ近くに生活の場があったことは容易に推定出来ることである。

## 2. 分布調査、測量調査について

発掘調査区周囲の丘陵を中心に分布調査を実施したが、小丸山古墳群については、従来古墳3基となっていたものが、方墳4基であることが判明した他、松の前古墳は1基となっていたが、計12基の方墳が接続していたので、以後は「松の前古墳群」と呼称した方がよいと思われる。

このように小規模の古墳群が丘陵尾根上に連なりその構築年代が、古墳時代前期～中期にかけてのものと推定されることから、当地区的低地一帯は、弥生時代に開発されたとしても、後期の頃であり、水田地として安定した経済基盤が確立されたのは、古墳時代になってからのことではないだろうか。

しかしながら、河川の氾濫は平安期にもあったようである。

測量調査は、この内、「松の前古墳群」として呼称されるに至った当古墳の内、2号墳（従来の松の前古墳）から10号墳までの計9基について100分の1の縮尺25cmのコンターネ（数字は標高）で実施した。各古墳の規模は別表のとおりである。



图144 余里景苑住宅平面图

松ノ前古墳群一覧表

	墳形	規 模	高 さ	測 量
1	方 墳	6 m × 6 m	約 1 m	×
2	"	17 m × 15 m	(南側) 1.5 m (北側) 0.5 m	○
3	"	8 m × 8 m	0.5 m 0.5 m	○
4	"	10 m × 10 m	0.7 m ほとんどなし	○
5	"	8 m × 10 m	1 m 0.7 m	○
6	"	10 m × 10 m	1 m 0.2 m	○
7	"	8 m × 8 m	0.8 m 0.2 m	○
8	"	10 m × 10 m	1.2 m ほとんどなし	○
9	"	8 m × 8 m	0.2 m 1 m	○
10	"	8 m × 8 m	0.2 m 0.5 m	○
11	"	7 m × 7 m	ほとんどなし 1 m	×
12	"	7 m × 7 m	" 1 m	×

- 注 ① 山本清「川津・持田平野の条里制」(川津郷土誌編修委員会『川津郷土誌』昭和57年11月6日所収)
- 松江市教育委員会「松江市の埋蔵文化財」1980中、H 057
- ② 島根大学考古学研究会「曾田考古第15号」1979年3月
- ③ 内田律雄「手染織からみた島根郡家とその位置について」(鳥根県立八雲立つ風土記の丘「八雲立つ風土記の丘№24」所収)
- ④ 岡崎雄二郎「道仙古墳群」(島根県教育委員会『島根県埋蔵文化財調査報告書第X集』1983所収)
- ⑤ 柴(しば)遺跡……古墳時代前期の住居跡2棟、溝2  
横山純夫・川原和人「主要地方道松江—境線バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ」島根県文化財愛護協会 1976.3
- 堤跡(つつみざこ)遺跡……内川津町の松江市立第二中学校移転用地内で古墳時代中期の住居跡10棟以上発見。現在調査中。
- 尚沢(ともざわ)A遺跡……古墳時代終末期の住居跡2棟確認。現在調査中。
- 松江市教育委員会「鷹沢A遺跡他発掘調査概報(1)」1984年3月
- ⑥ 山本清「山陰の須恵器」(島根大学開學10周年記念論文集)昭和35年2月所収
- ⑦ 柳浦俊一「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」(松江考古学談話会『松江考古学第3号』1980年9月所収)
- ⑧ 村上勇「山陰の中世のやきものに関する覚え書」(松江考古学談話会『松江考古第2号』1979年所収)

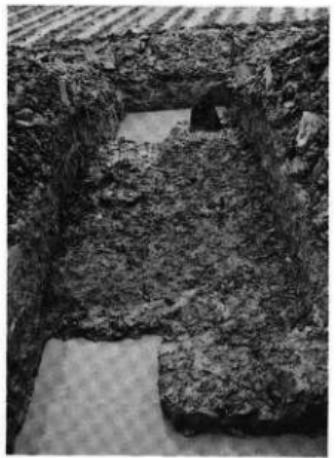
- ⑥ 松本岩雄「寺床1号墳関連資料一覧」（松江考古学談話会『松江考古第5号』  
1983年4月所収）



第1調査区 全 景



第2調査区 全 景



第3調査区 全 景 (北からみる)



第4調査区 東壁及び杭列



第5調査区 調査中



第6調査区 全景



第7調査区 発掘風景



第7調査区 全景  
(南からみる)



第8調査区 北壁土層



第9調査区 遺物出土状況



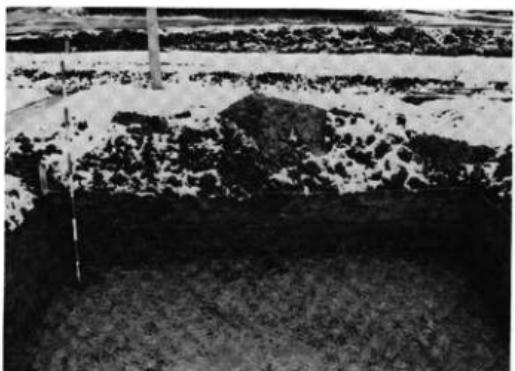
第10調査区 北壁土層



第10調査区 全 景



第11調査区 全 景



第12調査区 北 壁



第12調査区 埋め戻し風景



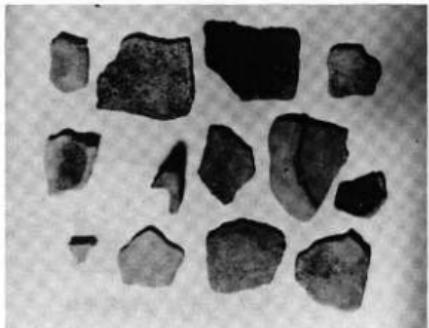
第13調査区 北壁



松の前古墳群遠景



和田太源古墳遠景



第9調査区 繩文土器片、須恵器片

第9調査区 繩文土器底部

第12調査区 土製支脚

第9調査区 叩き石

第12調査区 土師器壺口縁部

第12調査区 磨石

第12調査区 須恵器壺底部

出 土 遺 物 (1)



土師質指鉢



第12調査区 土師器 壺、杯片

第12調査区 土師器 把手、壺、須恵器  
第13調査区 指鉢

第12調査区 須恵器 杯頸底部

第12調査区 須恵器 杯底部、把手

第12調査区 土師器 壺、高杯片

第12、13調査区出土 黒曜石片

出土遺物 (2)

松江市北東部遺跡  
分布調査報告書(1)

昭和59年3月発行

発 行 松江市教育委員会

印 刷 千鳥印刷有限会社

松江市春日町 344-9

022